

垂水史談会報

第48号
2022(令和4)年
11月発行

ほか。

【研究ノート】

— 沖縄の本土復帰五十年に —

【報告】

「垂水のうたびと」展

第一回は天野微苦笑（俳句）・八木榮一（短歌）両氏

垂水史談会では、垂水の先人たちが残した文芸を広く市民に紹介しようと十月中、市立図書館で「垂水のうたびと」展を開催しました。

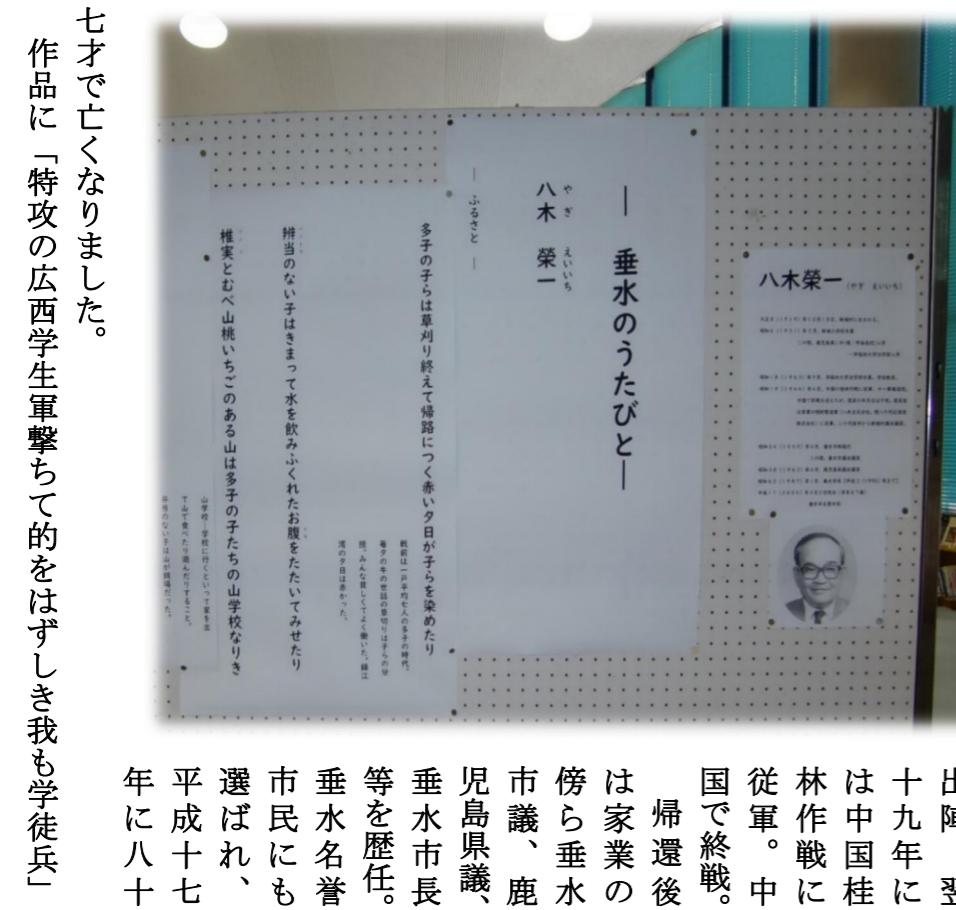
第一回目は俳句の天野微苦笑氏と短歌の八木榮一氏の作品を紹介。

天野微苦笑氏は垂水市二川の西宝寺の次男として生まれ、俳句のほか、様々な文芸に手を染めました。また、牛根の境小学校や百引の岳野小学校、餌島の江石小学校の校歌の作詞も手がけています。しかし、病気のため、昭和三〇年に四十八才の若さで亡くなりました。作品に「一湾に響く喚鐘賜日和」ほか。

八木榮一氏は新城の造り酒屋に生まれ、昭和十五年、早稲田大学法学部へ入学。戦況の悪化により昭和十八年九月卒業とともに学徒出陣、翌十九年に十九年には中国桂林作戦に従軍。中國で終戦。帰還後は家業の傍ら垂水市議、鹿児島県議、垂水市長等を歴任。

【注】
○中山使・・中山国（琉球）からの使者。○羈棲・・故郷を離れて他国に住んでいること。○画閣・・絵に描いたように美しい高殿。○梁塵・・部屋の梁に積もった塵。○寶帶・・宝石で飾った帯。○金釵・・金のかんざし。○同社・・社稷、ここでは薩摩の版図を同じくする意か。○投轄・・客の帰れないようになると同社の輦を憐れめば、寧ぞ異郷の人を隔てん。轄を投じて歛、愈よ熟し、衣を解きて情、倍す眞なり。笑談、五夜を忘れ、不覚にも清醇に酔う

【口語訳】
たまたま、琉球の中山国の使者を訪ねた。故郷の琉球から遠く離れ、薩摩に寄寓しているからには、親しく交際しなければならない。朱色の門構えは、馬を繋ぐには丁度よく、絵に描いたように美しい琉球館は、まさに訪問客を留めずには置かない。



過琉球客館觀舞樂 島津元直（貴澄）

偶問中山使 羈棲爾可親
朱門堪繁馬 画閣正畠賓
杯設西洋器 盤盈南海珍
舞酣高燭影 歌起動梁塵
寶帶兼腰曲 金釵結髮新
能憐同社輩 寧隔異郷人
投轄歡愈熟 解衣情倍眞
笑談忘五夜 不覺醉清醇

今年は沖縄が米占領下から日本に復帰して五十年の節目に当たります。垂水の歴史・文化で沖縄に関連するものを探してみたところ、垂水家第十代・島津貴澄の『廃籠詩稿』中に次の漢詩が入れられています。

藩制時代には、現在の県民交流センター（旧県庁跡地）に垂水島津家の屋敷があり、すぐ北隣には琉球館がありました。また、瀬戸口藤吉の父、覚兵衛氏は「鹿児島市小川町の琉球館の役人で、琉球館に住んでいた」と伝えられていることから、垂水と琉球との関係は今後研究の余地があります。

（ただし、読み下し、口語訳は未定稿）

七才で亡くなりました。

作品に「特攻の広西学生軍撃ちて的をはずしき我も学徒兵」

ある。

宝石で飾った帯は腰とともに揺れ、金のかんざしは髪を結んで真新しく輝いている。同じ薩摩の版図にあるともがらを大切に思つならば、どうして異郷の琉球ひとを隔てるものがあらうか。帰ることを忘れて、宴の喜びはいや増しに慣れ親しんでくるのである。着衣の帯を解いて交情はますます、まごころの交わりとなる。笑談して夜の更けるのも忘れ、不覺にも泡盛に酔つてしまつたのだ。

(瀬角)

【垂水市史料集（一）】より

西南之役 私学校生徒の従軍譚

④

記) 西南之役 私学校生徒の従軍譚

—立山健氏への聞き書き—

(山口栄之 筆)

かくて午後三時頃、夫卒が飯を竹籠に容れて担つて来た。それが待ちに待つた昼食である。夫卒が「何番隊の方々は何處にか」と、言わせも果てず「何番かん番もあるものが、早く此方へよこせ」と奪い取ることく受け取つてみると、その飯というのはまるで粟ばかりの物であった。それでも昨夜来、食わずに歩いたので極度に空腹を覚えていたから、只もう食り食つてしまつたのである。

暫く経つてようやく味方の大砲が到着したらしく、初めて味方の方から発砲する音がし出した。一同、踊りあがつて嬉しがつた。日暮れ前に戦いが止んで引き上げとなつた。味方の隊はただ散々に崩れていたが、安政橋に来た時ようやくまとまつた。そしてその夜はそこ河原に露宿したのである。

翌十一日（新二月二十三日）未明、小倉鎮台が来たというのでそれに向かつて繰り出されたので、だんだん進んでいくと、先発は既に植木で衝突したといつて途中陸續として死傷者を運んで来るのに出会つた。

向坂という所まで来ると今度は敵の殲れていのが多かつた。今度もし進まぬ者がある時は、後ろから切り捨つるぞ。特に田舎ん衆はヤツセン」と以ての外のことである。

面くらつて一同恐縮するかと思うとこれまで意外、「田舎ん衆との一言はけしからん」と、銳き憤怒の声を発して詰め寄るものがあった。そして「斬り込め、の号令があつても逡巡してえ進まんのは、むしろ御城下の人たちである。それに何ぞや田舎ん衆とは言語道断、侮蔑極まる。ヨシ然様仰せらるるなら、今後必ず城下ん衆が真っ先に斬り込まれるか、改めて拝見しましよう。そこで若し進まぬ方があつたら、この田舎者の我が輩、これを斬り捨つるぞ」と、大いに威嚇した。その面上には小贋の負傷で血塗れになつたが、あるいは敵を斬つた時の返り血を浴びたか、まるで赤鬼のような物凄い形相である。されば、さすがの御城下兵児等も辟易したと見えて、誰も一言酬いるものがなかつた。我々田舎者の方では痛快この上もないことであつた。さてこの人は頬杖の蜂須賀某という豪傑であつた。この人、初めは押伍であつたが、後には小隊長になつたようである。因みに云う、我が第七中隊は遊撃隊であつたのである。

ある一か所では十八個も遺棄されているのを見た。ようやく昼前の一時ごろ植木に着いたが、もう官軍の影もなくそこで休んでいる。午後三時ごろになつてまた来たというので直ちに出発し、今度は田原坂で衝突したが容易く撃退し、追撃しつつ木葉町に入つた時は夕方であつた。ここでは銃器弾薬の分捕り夥しく、なお追撃を続けて南の関の手前まで行き、そこから引き返して植木に来て休息した。

翌十二日（同二十四日）は雨の降る日で、戦いもなかつたから分捕り品の分配などがあつた。自分は戦友・安田次郎兵衛殿が昨日の戦いで腕に負傷されたのでその看護を命ぜられた。

鍋田河原の激戦 蜂須賀某の剛気

十三日（同二十五日）は山鹿に行つて、翌朝、鍋田河原という所から大進撃が開始された。

この日の合戦すこぶる烈しく、わが半隊長なども討ち死にした。またまた大勝利であつて、敵の遺棄死体は南の関の手前の腹切坂までの間に八十六個を数えたほどである。

その日はまた山鹿に引き上げたが、そのまま隊を組んで来いとの本當の命であるというので、「今日の戦いは見事な大勝であるから、これは必ずしも走りでもして大いに犒われることであろう」と思つていたところ、豈図らんやで、平野壯介隊長の曰く「斬り込めと命ぜられて直ぐ斬り込まねのはイカン。他の隊はどうあろうとも、わが第七中隊だけは真っ先に進んで斬り込まんにやイカン」。

*押伍・兵隊が落伍しないように監督する任務の兵。

(一以下次号一)